

人の住む土地といけにえ

坂大 真太郎

BANDAI, Shintaro

目次

1. 中心としての神殿
2. 人の住む地といけにえ
 - 2.1. 洪水前のカイン
 - 2.2. 洪水後のノア
3. いけにえのない地
 - 3.1. いけにえが不在のエジプト
 - 3.2. 混沌としてのエジプト
4. まとめ

1. 中心としての神殿

Jonathan Z. Smith は、論文「大地と神々」(“Earth and Gods”⁽¹⁾)において、「中心」や「秩序」という抽象概念を、古代から現代までのユダヤ教言説の分析に持ち込み、聖書文書やラビ伝承、イディッシュ民謡に登場する荒れ野、エルサレム、イスラエル、追放といった用語の再解釈に取り組んでいる。その取り組みの結果、それらの用語は、文字通りの地勢や地名、また歴史的出来事とは単純に解されず、秩序や混沌といったカテゴリーへと収められていった。

このような分析手法は何ら突飛ではない。というのも、我々は、ある本文を理解するには、必ず、何らかの抽象概念を用いて翻訳作業を行っているからである。たとえば、我々は、テキスト中の荒れ野を、多くの場合、「地勢」という一つの抽象概念に、エルサレムやイスラエル

は「地名」という抽象概念に、追放は、空間と関連付けられた「歴史的出来事」の一つにカテゴライズするだろう。そのような、既知の抽象概念を駆使した分類作業によって、我々は、テキスト中の文言を次々と理解の範疇に収めているわけだが、J. Z. Smith は、それらの抽象概念のリストに、宗教学が編み出してきた抽象概念を加えることを提言している。それが中心であり、秩序である。我々はテキストを読むとき、必ずそれを何らかの仕方加工しており、そのようにして我々は、解釈という行為を可能にしている。テキストへの忠実さを誇る解釈者であっても、結局は、この行為に拘束されているのである。

では、中心と秩序という概念をユダヤ教文書に持ち込んだ J. Z. Smith は、いかなる収穫を得ることができたのだろうか。それは例えば彼の次の一文に現れている。「礎石としての……神殿は、宇宙の保守管理にとって必要不可欠である。……神殿とそこでの祭儀は、世界を支える宇宙の支柱ないしは『聖柱』としての役割を果たしている。もしその務めが中断させられたり、廃止されたり、あるいは手違いの一つでも冒されるなら、そのとき世界は、すなわち祝福も豊穡も、それどころか中心から発生する森羅万象も、〔神殿や祭儀と〕同様に崩壊させられるだろう。……中心とそれが持つ能力の崩壊は、聖地に存在する、現実と世界の間の絆の破壊を意味する。手違いによってであれ、国外生活 (exile) によってであれ、その連結を分断することは、宇宙的災厄を意味する⁽²⁾」。このように J. Z. Smith は、さんざん読まれてきたテキストの解釈に、宗教史家として、真新しい概念を適用することによって、神殿の役割を再記述し、ユダヤ教における神殿と追放の神話の構造を明らかにしている。

さて、本論で私も、J. Z. Smith に倣い、秩序を支える柱という概念を用いることにする。適用の対象となるテキストは、ヘブライ語聖書中の、神殿ではなく、祭壇⁽³⁾といけにえに関するものである⁽⁴⁾。とはいえ、祭壇といけにえの双方は神殿と密接に結びついている。どちらも神殿で遂行されるからである⁽⁵⁾。紙幅の都合上、ヘブライ語聖書中の祭壇といけにえの記述を網羅的に分析することはできない。また、聖書外の文書に現

れるいけにえと祭壇についても考察したいが、それも省略することにした。したがって本論では、ヘブライ語聖書から(1)アベルのいけにえ、(2)ノアのいけにえ(と祭壇)、(3)エジプトでのいけにえの不在、(4)バビロンでのいけにえの不在というトピックを取り出し、それぞれに対して、中心という概念を用いた分析を試みる。いけにえと祭壇にも、世界の秩序を保守するという役割が担わされており、地上におけるその有無が、イスラエル人の世界を変容させるのである。

2. 人の住む地といけにえ

本章では、世界を秩序へと変える装置としてのいけにえ／祭壇を扱う。その役割は、アベルのいけにえとノアのいけにえ／祭壇とを比較することによって明らかになる。洪水以前を祭壇といけにえが不在だった時代と、洪水後を祭壇といけにえが据えられた時代と特徴付けることで、創世記を秩序の物語として理解できるだろう。

2.1. 洪水前のカイン

ヘブライ語聖書が物語る人類史において、初めて捧げられる「いけにえ」(ミンハー)は、アベルとカインの二人によってである。アベルは「羊の群れの中から肥えた初子を」いけにえとして持って行き、カインは「土の実りを」いけにえとして持って行った(創4:4)。アベルの献げ物はヤハウエの目をひきつけるが、カインの献げ物はそうではない。ヤハウエが注意を向けたいけにえを捧げたアベルは、カインに殺され、他方、カインは、さすらう者として町を建てる(創4:16-17)。創世記が描く、アベル亡き後の大地の状態は我々にとって重要である。「土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる」、とヤハウエは語り、「今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者とな(る)」、とカインは語る(創4:12、14)。カインは、確かにエデンの東に住み、町を建てるが(創4:16-17)、土が作物

を産み出さないという過酷な環境は、カインとその子孫たちを苦しめる。それゆえ、カインの子孫のレメクが、「主の呪いを受けた大地で働く我々の手の苦労」に言及するのは当然のことと言える（創 5:29）。いけにえを捧げる者アベル亡き世界は、安定を望むことができない。そこでは「人の悪が増し」（創 6:5）、地は「神の前に墮落し、不法に満ち（る）」（創 6:11-12）。では、大地にかけられた呪いはいつ、どのように解消されるのか。その解消への希望は、混沌への逆行である大洪水によって潰えてしまう（創 7:21）。

カインが町を建てたとの記述のゆえに、読者は、人類は場所を獲得したのだと解釈するかもしれない。しかし我々は、この時点では地が作物を産み出しておらず、いけにえも祭壇も存在していないという点を見落としてはならない。農耕といけにえと町の三者の関係については、アッリアノスの『インド誌』が、次のように描写している。「もともとインド人は、あたかも農耕をいとままないスキュタイ人と同様、遊牧の民であった。スキュタイ人は彼らの荷車でスキュティアの地をここ彼処、転転としてその居場所を変え、町にも住まず神神の社を祀ることもない。そんな風にインド人も〔昔は〕町を持たず、神殿を建てることもせず、殺した野獣の生皮を身にまとって、樹の皮を食用にしていた⁽⁶⁾」。ここでは、(1) 農耕を営むこと、(2) 町に住むこと、(3) 神殿を建てること、が、原始状態からの脱却の要件とされている。カインから大洪水までの世界は、まだ (1) と (3) を欠いており、半ば原初状態にあるのである。翻して言えば、創世記は、登場人物の一人に損な役回りを負わせることで、その時代を (1) と (3) を欠いたものとして描き、こうして、人類史における最初期の情景を構築しているのである。

『インド誌』も語るように、人が、自らを住まう存在とするには、特定の場所を耕し、そこに神殿と町を建てねばならない。ところがカインは、アベル殺害後、農耕を営むことができず、神殿での儀式の構成要素であるいけにえを捧げることもできない。いけにえは、人が住むのに適した土地で行われねばならない。いけにえが捧げられる場所、言い換えるな

ら、祭壇や神殿が建てられる場所、そこを人は獲得することができるのである。あるいは次のような言い方もできるかもしれない。人はいけにえを捧げることによって、そこを自らの土地とする、と。いけにえの儀式によって保守管理されない大地は、容易に混沌に戻ってしまう。以上の指摘は、次節のノアによる祭壇の建立といけにえの記事を考察することによって確かめられるだろう。

2.2. 洪水後のノア

混沌に戻ってしまったこの世界に秩序をもたらすのは、ノアである。ノアは、「主のために祭壇（ミズベアハ）を築（き）」、清い動物を「焼き尽くす捧げ物（オーロート）として祭壇の上にささげ」、ヤハウェから世界の秩序の約束をとりつける（創 8:20-22）。すなわち、種蒔きと刈り入れのサイクルである。ノアが取り戻すその秩序は、洪水前の人物レメクの次の予言によって描写されている。「主の呪いを受けた大地で働く我々の手の苦勞を、この子は慰めてくれるであろう」（創 5:29）。カインから大洪水までの時代のいかなる人物によっても達成されなかった呪いの解消を、ノアは、いけにえを捧げる者として成し遂げる。彼は、第二のアベルよろしく、家畜のいけにえを捧げる。その後でヤハウェは言う、「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」と（創 8:21）。こうして、アベル以来——さらに遡れば、アダム以来——呪われていた大地が回復する（創 3:17-19）。祭壇が立てられ、いけにえが捧げられることにより、大地は人が住むのに適する場所へと変えられる。

祭壇を築く前、ノアが身を置いていた場所は箱舟の中であったが、それは「大地を離れて浮かん（で）」いたゆえ、場に固定されていない空間であった（創 7:17）。したがって、短期間とはいえ、ノアはカインのごとき放浪者だったのである。その放浪の人類史に終止符を打つべく、ノアは箱舟から出、乾いた地に降り立ち、そこに祭壇を築き、いけにえを捧げる。そしてついに、大地がヤハウェによって祝福される。祭壇が建てられ、いけにえが執行された地上は二度と滅亡することがない。天に⁽⁷⁾

属する水の最初の用途は人類を絶滅することだったが、今や、同じ水は、人の住む地を潤すために穏やかに降り注ぐこととなった。

マラキ書のヤハウエの言葉は、洪水前後の地上の対比を明瞭化する助けになるだろう。「必ず、わたしはあなたたちのために／天の窓を開き／祝福を限りなく注ぐであろう。また、わたしはあなたたちのために／食い荒らすいなごを滅ぼして／あなたたちの土地の作物が荒らされず／畑のぶどうが不作とならぬようにする」(マラ 3:10、11)。恵みの雨の観念は、申命記にも見出される。ヤハウエは約束の地を魅力的に紹介しようと、次のように言う。「あなたたちが渡って行って得ようとする土地は、……天から降る雨で潤されている」(申 11:11、12)。ノアは、動物のいけにえを捧げることで第二のアベルとなったが、同時に、土を耕す者として、第二のカインともなったのである⁽⁸⁾。

以上のような経緯で、大洪水後の人類は大地を獲得しようとする。ノアは、祭壇を建て、いけにえを捧げ、農夫になることで、大地に住む者となった。それはアダムもアベルもカインも成し遂げることができなかったことである。彼らはいけにえと農耕が不在の土地で暮らさねばならなかった。ノアはそれを克服する。ただし、ノアは町を建てていないため、大洪水後ただちには、定住者としての人類の歩みは開始しない。ノアは、町を建設しなかったという意味で、第二のカインになることはできなかったのだ。創世記 11 章で、ノアの子孫たちは町の建設に着手するが、それはヤハウエによって妨害されてしまう。人類にとって理想の町がヘブライ語聖書に出現するためには、ダビデとソロモンの登場を待たねばならない(王上 6:1、13; 8:62)⁽⁹⁾。

いけにえの儀式の唯一の執行者であるアベルの死によって、洪水以前の大地はいけにえの儀式を失い、世界は支柱を失ったがごとく、混沌へと急速に逆行する。すなわち、大地は呪われたまま実りを産み出さず、地上には悪がはびこり、最終的には大洪水によって、世界は原初の状態に引き戻されてしまう(創 6:5、11)。しかし、大地の呪いを解く役目が運命付けられていたノアが、箱舟上での放浪を経験した後、乾いた地に降

り立ち、そこに祭壇を建立し、いけにえを捧げることで、世界に秩序を取り戻す。季節と農作業の循環が確立され、ノアは農夫になる。その一連の過程においてノアは、世界の諸区分と規則の創設の一端を担っており、その意味で彼は天地創造に参加していると言える。こうして我々は、祭壇といけにえを、神殿のごとき、世界を居住可能にする装置として理解できるだろう。大洪水前後の記述は、このように、J. Z. Smith が提案した中心と秩序という概念使用によって理解することができる。祭壇／いけにえは、地上の居住可能性を示すのである。

3. いけにえのない地

本章は、ヘブライ語聖書中の祭壇といけにえの存在しない土地としてエジプトに注目する。というのも、そこは、祭壇のいけにえの在／不在という観点から見ると、一つの特徴を持つからである。それは、イスラエル人が住むことのできない混沌の世界である。我々は洪水前後のいけにえをめぐる物語の分析を通して、祭壇やいけにえの整備が、混沌を秩序へ、不安定を安定へと作り変える役割を持っていることを指摘した。もしそうであるなら、祭壇といけにえの建立を拒否する土地は、反対に、混沌としての特徴を持っていると考えられるはずである。その事例として、次節では、エジプトを挙げる。

3.1. いけにえが不在のエジプト

前章では、祭壇といけにえの、秩序をもたらす力を洪水物語から読み取った。本節では、いけにえがエジプトにおいて捧げられることない、という点を指摘するだけでなく、エジプトが混沌の地としての意味を持つことも論じ、混沌といけにえ／祭壇との関係の事例の一つとする。

ヘブライ語聖書中では、いけにえがエジプトで捧げられることはない。⁽¹⁰⁾この鉄則は、ファラオに直接的に表明されている。「どうか、今、三日の道のりを荒れ野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください」(出 3:18)。「ファラオがモーセとアロンを呼び寄せて、『行って、

あなたたちの神にこの国の中で犠牲をささげるがよい』と言うと、モーセは答えた。『そうすることはできません。……我々の神、主に犠牲をささげるには、……三日の道のりを荒れ野に入らねばなりません』(出 8:21、23)。犠牲はあくまで、エジプトの外で捧げられねばならないのだ。⁽¹¹⁾

イスラエル人にとっていけにえを捧げる場所として不適切なエジプトは、住む場所としても不適切である。「王は……民をエジプトへ送り返すことがあってはならない。『あなたたちは二度とこの道に戻ってはならない』と主は言われた」(申 17:16)。神の呪いの言葉にもエジプトは登場し、次のように語られる。『『あなたは二度と見ることはない』とかつてわたしが言った道を通して、主はあなたを船でエジプトに送り返される。そこでは、あなたたちが自分の身を男女の奴隷として敵に売ろうとしても、買ってくれる者はいない」(申 28:68)。いけにえを捧げてはならない場は、住んではならない場と同義である。アブラハムはめぐる所々に祭壇や柱を建てるが、エジプトの地にはそうしない。ヤコブも同様である。エジプトで奴隷生活を送っていたイスラエル人は、エジプトで祭壇を建てたり、いけにえを捧げたりしない。⁽¹²⁾

3.2. 混沌としてのエジプト

我々にとってさらに重要な点は、ヘブライ語聖書において、エジプトがイスラエル人にとっての混沌を象徴していることである。例えば、出エジプト記の冒頭で、イスラエル人たちは、虐待され、酷使され、粘土こねやれんが焼き、「あらゆる農作業などの重労働によって」苦しめられている(出 1:11-14; 2:23)。エジプトとは、イスラエル人にとって不穏な土地であるのだが、さらにそこは、大洪水以前の地上の呪われた状態を体現する土地でもある。申命記は、エジプトを、大洪水以前の世界に似せて、次のように描写する。「あなたが入って行って得ようとしている土地は、あなたたちが出て来たエジプトの土地とは違う。そこでは種を蒔くと、野菜畑のように、自分の足で水をやる必要があった。あなたたちが渡って行って得ようとする土地は、……天から降る雨で潤されている。

それは、あなたの神、主が御心にかけ、あなたの神、主が年の初めから年の終わりまで、常に目を注いでおられる土地である」(申 11:10-12、創 3:17-19; 4:12)。エジプトは、天からの水に乏しい土地として描写されている。それは、雨が降らず、作物が期待できなかった洪水以前の世界の投影である。エレミヤ書の描写はさらに鮮烈である。「あくまでエジプトへ行って寄留しようとする人々をわたしは取り除く。彼らはひとり残らずエジプトの地で滅びる。……エジプトにいるユダの人々は、ひとり残らず剣と飢饉に襲われて滅びる」(エレ 4:12、27)。

以上のような、混沌——大洪水以前の世界——としてのエジプト像と、神殿や祭壇、いけにえを欠いた土地としてのエジプト像は、ヘブライ語聖書中で互いに組み合わせることによって、一つの役割を担っている。すなわち、十の災いや呪いの言葉のみならず、いけにえや祭壇の不在の描写によって、エジプトへの嫌悪を強く表現している。エジプトからいけにえや祭壇を取り上げるような描写の一貫性は、ヘブライ語聖書のエジプトへの態度を反映していると言えよう。

4. まとめ

イスラエル人が住処とする土地は、約束の地だけではない。我々は、聖書内外の文書が、バビロンやアレクサンドリア、また、ローマにあるユダヤ人共同体について語っていることを知っている⁽¹³⁾。そういったイスラエル国外のユダヤ人共同体の中には、自分たちのためのヤハウエ神殿を持つものがあつた。例えば、エレファンティネ文書の一つは、エジプトの部隊がエレファンティネにあつたヤハウエ神殿を破壊し、焼き払つたことを告発し、その再建をユダの総督バガヴァフヤに依頼している⁽¹⁴⁾。また、同じくエジプトのレオントン・ポリスには、紀元前 160 年ごろから 150 年ころまでオニアス三世が建てたエルサレムの都と神殿に模した都と聖所があつたという⁽¹⁶⁾。これらの記事がどの程度正確な史実を反映しているかは、ここでは問題にしない。いずれにせよ、ヘブライ語聖書は、そのようなエジプト像を構築することを好んでいないように見える。へ

ブライ語聖書にとって、そこはいけにえと祭壇のない土地、混沌が支配する世界、すなわち、イスラエル人が住んではならない土地である。雨の降らない土地、耕作しても作物を産出しない土地、厳しい労働が課せられる土地、子供たちの命が危険にさらされる土地、そして、いけにえと祭壇の存在しない土地。これらは、イスラエル人にとって適切な土地と不適切な土地の、不適切さの方を意味している。自らにとって不適切な土地に住むということは、場所を失っているも同然である。祭壇といけにえが不在のエジプトは、世界のそのような側面を描出している。

エジプトは、単に地理的な位置や範囲を指し示す名称ではない。Jan Assmann は、出エジプト物語における「エジプト」が、意味上の対立する二項の一方を体現しているとして、次のように述べている。「物理的、政治的位置関係を表した地図の上では、古代イスラエルと古代エジプトは、地中海東岸における、隣り合わせの二国であった。……しかし、記憶の地図上では、イスラエルとエジプトは互いに反目する世界として現れる。……イスラエルは真理を体現しており、エジプトは暗黒と過ちを象徴している。……イスラエルはエジプトの否定であり、エジプトは、イスラエルが克服してきたあらゆるものを表している。この対立関係の図は、ある大物語の形式をとっている。すなわち出エジプト神話である。……出エジプト神話が……引き起こす文化的他者性と対立の構造を、後期青銅器時代の何らかの歴史的体験へと還元することはできない⁽¹⁷⁾」。

祭壇ないしはいけにえという概念を用いて表現された秩序と混沌の構造は、ヘブライ語聖書のアベルとノアの物語の共通基盤を成し、さらには、出エジプト神話、バビロン捕囚神話の底流へと敷衍している。それぞれの物語において、祭壇といけにえの不在は、混沌、不作、労苦、危機、放浪と共に、世界の一方の側面を表している。本論は、J. Z. Smith を真似て、中心と秩序の概念を取り入れた、祭壇／いけにえの解釈を試みた。その際には、物語の構造を把握するために、不十分ながらも、若干の聖書外資料を比較材料として利用した。本論文は、ささやかながら、

複数の物語の構造を浮かび上がらせる試みを行うことができた、という点で収穫があった。

注

- (1) Jonathan Z. Smith, “Earth and Gods,” in *Map is Not Territory* (Leiden, 1978), pp. 104–128.
- (2) J. Z. Smith, “Earth and Gods,” p. 118. この引用箇所のと訳は、ミルチア・エリアーデ著、楠正弘、池上良正訳『オカルティズム 魔術 文化流行』（未来社、1978年）、53頁に載せられているが、文意を明瞭にするため私がここで訳し改めた。
- (3) 「祭壇」と訳されるヘブライ語は「ミズベアアハ」である（創 8:20、出 17:15）。
- (4) 本論で引用される日本語訳聖書は、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、1993）である。原文は、*Biblia Hebraica Stuttgartensia* (fünfte, verbesserte Auflage) (Stuttgart, 1997) を参照した。
- (5) 神殿と祭壇の間には相似関係が見出される。それは、祭壇と神殿のそれぞれにおいて中心的な役割を負う人物を比較することによって見出される。G. Garbini は、アベルと祭司たちが相似関係にあることを指摘し、次のように述べている。「……アベルがカインの弟であるという事実はさほど重要ではない。きわめて重要な点は、アベルがヤハウェに捧げ物をした人物であった、ということである。アベルのいけにえは平凡なものではなかった。いけにえがその脂と共に焼かれた、との詳述は、そのいけにえが特別な種類のいけにえであったことを示唆している。さらに非常に重要な点は、アベルが、自らの所有する群れの初子を捧げた、ということである。というのも、レビ記 27 章 26 節と民数記 18 章 17 節に記されているように、初子の捧げ物は、祭司たちの特権だったからである。それゆえ、アベルはヤハウェの祭司だった。そしてカインの神話上の処罰免除は、ある祭司を殺害した何者かに下げ渡された歴史上の処罰免除を予型するために用いられたのである」（Giovanni Garbini, “Cain’s Impunity,” in *Myth and History in the Bible* (London, 2003), p. 20)。

- (6) アッリアノス著、大牟田章訳、「インド誌」7章2-3節、『アレクサンドロス大王東征記 下巻』（231-317頁）所収（岩波書店、2001年）。
- (7) カインによって呪われた大地は（創 4:12）、実はすでにアダムによって自ら産物を生じさせなくなっている。我々は大洪水以前の地上に雨が降っていないことを知っている。地上に水をもたらししていたのは、雨ではなく、地下から湧き出る水と川であった（創 2:5-6、10）。しかし、アダムのせいで土は呪われ（創 3:17）、「土は茨とあざみを生えいでさせる」こととなる（創 3:18）。そのような劣悪な環境下でアダムとその息子カインは土を耕さねばならなかった（創 3:23; 4:2）。洪水以前の人物レメクはその状況を、「主の呪いを受けた大地で働く我々の手の苦労」という言葉で描写している（創 5:29）。それは、申命記で語られるエジプトの状況の類似である。すなわち、「そこでは種を撒くと、野菜畑のように、自分の足で水をやる必要があった」（申 11:10）。この状況を打破するのがノアである（創 5:29）。
- (8) 創世記は大洪水前の作物の品種名を教えないが、大洪水後のそれは「ぶどう」とされる（創 9:20）。
- (9) イスラエル人にとって理想の町を手に入れたソロモンの時代に、イスラエル人は最大の領土を手に入れる。それは「ユーフラテス川からペリシテ人の地方、更にエジプトとの国境に至るまで、すべての国」を覆った（王上 5:1）。
- (10) しかし、エジプトの国土でいけにえが捧げられた形跡が、出エジプト記には、私が知る限り二箇所見出される。まず、(1) エジプトを出発する直前のモーセの命令の言葉である（出 12:1、42）。「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい」（出 12:21）。これは、エジプトでいけにえが捧げられたことを伝えているのだろうか。そうではない。なぜなら、ここで新共同訳が「過越の犠牲を屠りなさい」と訳す原文を訳し直せば、単に「その過越〔の羊を〕をあなた方は屠殺せよ」であり、そこに「犠牲」を示す語は見当たらないからである（出 3:18; 8:22、23、ヨブ 1:5; 42:8 と比較）。この儀式での屠殺行為は、もっぱら儀式に参加する者たちが食べるためのものであり、祭壇が必要とされる類のいけにえではない（出 12:4、7、8）。では、(2) その直後の「これが主の過越の犠

牲である」との説明はどうであろうか(出12:27)。ここでは確かに「犠牲」(ザバフ)という語が用いられている。しかし、見落としてならないのは、この説明は、約束の地に入った後、子供たちに対してするものとされていることである(出12:25、26)。このように、エジプト国内での過越の儀式において羊が屠られる場合においてさえ、その行為はいけにえや捧げ物としては言及されていないのである。エジプトの国土において犠牲を捧げることはできない、という原則は守られている。

- (11) 出エジプト記によれば、その理由は、イスラエル人がヤハウェに捧げる犠牲は、エジプト人が嫌うもので、それを犠牲にすればエジプト人が激高する、というものである(出8:22)。しかし、いけにえは人類——ここではイスラエル人へと限定されるが——にとって居住可能な場所で捧げられる、というパターンに従った解釈を試みる我々は、そのみを根拠とはしない。
- (12) バビロンに連れて行かれたイスラエル人たちも、そこでいけにえを捧げたり、祭壇を建てることはない。バビロンにいたダニエルがする儀礼らしいことは、「二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげ(る)」ことである(ダニ6:11)。
- (13) エジプトのエレファンティネに紀元前五世紀の終わりにユダヤ人の軍人たちのコロニーが存在したことが、そこから出土したアラム語パピルスによって確かめられている(Bazael Porten, *The Elephantine Papyri in English*, 2nd (Atlanta, 2011), pp. 75-89)。アレクサンドリアのフィロンは、「ローマのティベル川の対岸の大きな部分がユダヤ人たちによって占められ」ている、と伝えている(フィロン著、秦剛平訳、「ガイウスへの使節」23章155節、『フラックスへの反論』(京都大学学術出版会、2000年)86-216頁所収)。アグリッパス二世は、「この世界でわれわれの同胞の一部を含まない民族などないからだ」と語ったとされる(ヨセフス著、秦剛平訳、『ユダヤ戦記1』(筑摩書房、2002年)2巻14章398節)。カッパドキア人ストラボンが、「およそ人の住む世界は、すべてユダヤ人で満たされている」と書いたという(ヨセフス著、秦剛平訳、『ユダヤ古代誌4』14.7.114)。バビロニアのニップールからは、八十個のユダヤ風の

名前が記された、紀元前四世紀のもつとされる粘土板「ムラシュ文書」が見つかっている (Megan Bishop Moore and Brad E. Kelle, *Biblical History and Israel's Past* (Cambridge, 2011), pp. 345, 362)。

- (14) T. L. Thompson は、エレファンティネ文書中の「イエフド」は地名でも、ユダヤ地方のユダヤ人を指しているのでもなく、エレファンティネの宗教団体の名称であり、それはヤハウエへの帰依を生活の中心を置いていることを意味していたのではないか、との所見を述べている (T. L. Thompson, *The Mythic Past* (London, 1999), p. 257)。
- (15) Bazel Portern, *The Elephantine Papyri in English, 2nd* (Atlanta, 2011), pp. 141-149.
- (16) ヨセフス著、秦剛平訳、『ユダヤ戦記 1』(筑摩書房、2002年) 1. 1. 33。
ヨセフス著、秦剛平訳、『ユダヤ古代誌 4』(筑摩書房、2000年) 14. 9. 388。
- (17) Jan Assmann, *Moses the Egyptian* (London, 1997), pp. 6-7.

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学
ばんだい・しんたろう)